

「退屈な少年」参考資料一覧 第139回 福永武彦研究会 2013.3.31 配布資料に追記

\* 要旨は資料作成者の主観によるものであり、執筆者の意図と一致しているかどうかは不明です。

1. 福永自身による言及など

No.	タイトル	著者	書名 (出版社)	初出年/月	ページ数	要旨
0	「退屈な少年」初出と書誌	—	福永武彦全集 第6巻 附録 他より (新潮社)	—	1	・初出：「群像」昭和35年(1960)6月号 ・単行 1. 「廃市」初版。昭和35(1960)年7月新潮社刊。四六判、紙装、カバーつき。装丁 岡本半三。本文241頁。内容：「廃市」、「沼」、「飛ぶ男」、「樹」、「風花」、「退屈な少年」、及び「後記」(著者)。 2. 「廃市・飛ぶ男」新潮社文庫版に収録。昭和46年(1971)6月刊。カバー装画 麻田鷹司。本文331頁。内容：「夜の寂しい顔」、「影の部分」、「未来都市」、「廃市」、「飛ぶ男」、「樹」、「風花」、「退屈な少年」、及び「解説」(清水徹)。
1	福永武彦全小説 第6巻 序	福永武彦	福永武彦全小説 第6巻  福永武彦全集(新潮社) 第6巻に所収	1974/03	3 全集)	この頃の私の作品は、大体に於て固定観念或いは強迫観念を、一つの気持として作品の内部に閉じ籠めてしまおうという傾向のものが多い。(略) 「廃市」はこの新しい作風、つまりロマネスクの追求といった傾向のもので、「退屈な少年」などもこれに属するだろう。(引用)

2. 文芸関連雑誌

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
1	主要モチーフからみた福永武彦	柘植光彦	国文学 解釈と鑑賞 1974年2月号 憧憬の美学 堀辰雄と福永武彦	1974/02	6	(「少女」のモチーフについて) たとえば川端康成において、その少女への偏愛は、明らかに母性追慕の変形である。写真もなく、なんの手がかりもない母の像、それを周囲にいる女性たちのなかに見いだそうとした幼年期。つまり母なるものへの憧憬が、幼年の時点へと自分の意識をさかのぼらせ、そしてその風景の中にある少女たちの像をよみがえらせる、という図式である。 福永武彦の少女志向も、この図式の上に置くことができる。だから、福永作品の少女は、つねに少年の眼にうつった年上の女性という性格をもつ。 「僕も好きだよ。僕も雪ちゃんが大好きさ。だって雪ちゃんは亡くなった母ちゃんに似ているもの」(「退屈な少年」) という構造だ。(引用)

3. 新聞、文庫/全集 解説他

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
1	文芸時評	中村光夫	『朝日新聞』昭和35年5月19日	1960/05		終りに小説らしい小説のなかの佳作をあげると、福永武彦氏の「退屈な少年」(群像)、三浦朱門氏の「メチル・アルコール」、遠藤周作氏の「再発」などがあります。いずれも作者が素材をよくつかんで楽しみながら書いていて、とくに福永氏のは仕事も念入りな力作ですが、欲をいうと、どれも話がですぎている、作品の出来のよさが、案外そのモチーフの軽さからきているのではないかと思われる。(引用)
2	文芸時評	河上徹太郎	『読売新聞』昭和35年5月25日	1960/05		この14、5歳の頭脳の論理機構からは一つの人間的な理論は生れて来ない。その自殺未遂は他のすべての空想と同じく、現実的であると共に不条理である。結局この自殺にナゾがないようにこの小説にもナゾがない。だから題名が「退屈した少年」ではなくて「退屈な少年」なのであろうか。(引用)
3	文芸時評	小松伸六	『新潟日報』昭和35年5月26日	1960/05		尋常な小説の面白さからいえば、母をなくした思春期の少年が新しい母をむかえるその心象風景をうつしだした福永武彦(群像)がいい。(引用)
4	今月の小説	平野謙	『毎日新聞』昭和35年5月28日	1960/05		すみからすみまでよく考え抜かれた緻密な作品である。(略)一見平穏な日常生活も、一皮めくれば、どんな陥穽、危機がかくされているか、知れたものじゃない、親子、兄弟といえども、この程度の異和、孤独の上に、日常生活はいとなまれているものなのだ。これが作者の語りたかったテーマだろう。このテーマをうきあがらせるために計量しつくした作者の知的操作は、いかにも巧緻なものである。少年を殺さなかったのも、推理小説との相違をよく心得た作者の心意気だろう。しかし、日常生活のなかにひそむ孤独や異和の性質が納得できたということと、そこから読者がいいしれぬ恐れを感じ得ることとは、またおのずから別のことがらである。手ぎれいに図式をならべてみせることが、そのままリアリティを生むゆえんではない。(引用)
5	文芸時評	中村真一郎	『東京新聞』昭和35年5月29日	1960/05		この作品は独立した小世界を完結させている。それは現実の家庭生活を描いた作品である。しかし、この小説のなかでは、われわれの日常的な荒びた感情生活では忘れていた小さな微妙な心の動きが、非常に鮮明な線を描いて、表現されている。ここでは、なんでもないことの連続が、静かな音楽のように美しく流れている。 もし、この素材がそれだけのものとして、粗雑な表現でほうりだされたのだったら、それはつまらぬ、あるいはばかばかしく、さえない作品となつたらう。(略)しかし、この作品の繊細なハダ触りと、古典的な形式感覚とが、読者をひとつの別世界に招き入れる動きをする。それが作品を滑けいさから救っている。 さらに、この作品は福永の様々な面にひかれる読者を、ひとつに集めるだろう。作者は巧妙な手付きで、ここに「夜の時間」の青年の苦しみと、「夢見る少年の昼と夜」の子供の内面と、いく多の作品で取りあげられた、女性の孤独とを、ひとつの筋のなかに、つり合いをとって配列してみせてくれた。そうしたいくつかの主題の、作者の精神内部での絡み合い方を自己告白的でなく、小説という形式で展開している点で、私は特別な関心を、この作品に持った。(引用)
6	文芸時評	清岡卓行	『図書新聞』昭和35年6月4日	1960/06		緻密な構成と清潔なヴォキャブラリーで独特な味わいをもっている。精巧なカット・グラスをその周囲から眺めまわすとき、その容器がたたえている空気にある雰囲気を感じられるように、作者に連れられて登場人物たちの意識と行動を何回となく巡回していると、しだいに家庭の雰囲気が現われてくるのが感じられる。それは日本的なインテリゲンチヤが可能性としては今でも抱かなければならないもの、個性による家庭への親愛と反発の、消去法的な一種の空白感である。(略)ここにある家庭から浮かびあがるものは、何よりも先ず個と連帯の間隙である。(引用)

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
7	文芸時評	針生一郎	「日本読書新聞」昭和35年6月6日	1960/06		家族の心理的関係を、いくつもの旋律が交響しあうフーガのように、精緻な構図で描いてみせる。(略)少年の不安定な感受性を鋭い刃物で剥ぎとるように描き出すのが、作者のねらいだろう。それにしても、この工夫をこらした作品が、絵ときめいた印象しかあたえないのはなぜだろうか。作者のなかのデーモンと夢の質にかかわる問題である。(引用)
8	鼎談・文芸時評	佐々木基一 平野謙 山室静	「近代文学」昭和35年7月1日	1960/07		(発言の要旨) 佐々木：非常によく計算された小説。父が再婚しようとかまわない、しかし、母に対する憧憬の念は潜在意識として少年の中にある。そういうどうしようもないずれに、人間の本源的な孤独がある。 平野：非常によく考えられて、設計はとてもしキチンとできた小説。推理小説を書くだけある。ある程度、家庭構成員の違和感があつて、しかし、全体としては事なしという意味があるのではないか。 山室：ていねいに書き込まれているが全体としては感心しなかった。心理の動きをその人間の存在との結びつきにおいて捉えることにあまり興味をもたず、推理小説的な興味が勝っている小説。
9	「廃市・飛ぶ男」解説	清水徹	「廃市・飛ぶ男」新潮文庫解説	1971/06	8	福永氏の作品には「死」を主題とした、あるいは主調低音としたものがじつに多い。しかし、「死」とのあいだにある距離を設定し、そのことにより「死」をほとんど対象化し、あるいはおだやかな雰囲気としてしか作用しない舞台装置たらしめているおそれ唯一の作品として、これは注目すべきものである。麻生教授と三沢さん、舜一と雪子、舜一と謙二……というように、登場人物たちはふたりずつつぎつぎと組になって、死の虚無の上で、たわむれに似たカドルールを踊る。そのような批評的なまなざしによる冷静な処理が、少年を主人公としたこの作品を、子供っぽさに陥ることから救い、典雅な均衡を与えていると言うことができるだろう。(引用)

#### 4. 大学研究紀要、その他研究録

No.	タイトル	著者	資料	初出年/月	ページ数	要旨
1	「退屈な少年」論—〈長編の季節〉への礎石	宮脇公夫	金沢大学語学・文学研究 第25巻	1996/07	14	(要旨) ・長篇「夢の輪」に先立って執筆されたこの作品は、「夢の輪」同様、一人物・一視点・一章という構成の小説であり、長篇と関わる要素を多く内包しているように思われる。 ・一見、謙二が中心人物であるかのように読めるが、五人の視点人物それぞれにその内面に抱える問題に対して内面意識を表白していく。従って、誰か一人の物語として読むことはできない。 ・結婚問題・恋愛問題・子供の内面意識の異なる三つの素材をほぼ同等の位置づけで「家庭」という頂点で結びつけ、一つの作品の中に組み込み構築したことがこの作品の大きな特徴であり、福永にとって新しい試みだった。 ・「忘却の河」の手法や構図は、「退屈な少年」のその延長線上に存在した。
2	福永武彦「退屈な少年」論	馬場重行	文藝空間第10号 総特集＝福永武彦の「中期」	1996/08	12	(要旨) 教師としての福永の側面から、本作品の教材価値という観点で本作品を論じている。 愛をめぐっての様々な問題が展開されている本作品の物語内容の把握、問題とされる項目を挙げ、読みを繰返す中で語りの特徴を理解することなどの作業の中からテーマやその他の主題を発見し、それを読み手の現実と関連させて論じていくところに、この作品の教材価値としての可能性を見いだせるのではないか。